

# やぶれ傘



一〇九号

二〇一九年八月



ざざ降りの昼には上がる豆ごはん 根橋宏次

木漏れ日をすこし外れて龍の髭 大島英昭

羽ばたいてあとは三角夏つばめ きくちきみえ

野良猫の喰ひ差しまでの蟻の道 藤井美晴

雨のまま空の暮れゆく合歡の花 廣瀬雅男

「紫」をこまかして書く薄暑かな 小山よる

マスクしてサングラスして夏帽子 丑久保 勲

レンズ換へ祭屋台の真ん前へ 瀬島洒望

タミア聞くに今夜は少し暑すぎる 青谷小枝

横断のひと無き梅雨の信号機 安藤久美子

靴先が道の小石を蹴つて梅雨 渡邊孝彦

ときどきの居眠りに聞く枝蛙 白石正躬

また少し雨意ある風や花菖蒲 天野美登里

前山に雨雲かかる山女釣 秋山信行

池に風半夏生草右に揺れ 有賀昌子

抄 集 句 傘 紀 大 崎 夫 選

梅雨晴れの並木のベンチ隙間なし 松村光典

螢火のひとつがすいと神木へ 貫井照子

草茂るホルスタインは点点と 萩原久代

梅雨の月濁りし川を照らしけり 武藤節子

豆飯を井に盛りけふの昼 森 美佐子

静けさの中より香る夜干梅 山本久枝

枇杷落つる音にも慣れて雨の夜 奥田温子

朝曇始発のバスの席埋まり 神山市実

水面に波紋つぎつぎあめんぼう 亀岡睦子

時の日のからくり時計雨しとど 倉澤節子

軽口をたたける奴と泥鰌鍋 黒澤次郎

駅までを右に左に薔薇を見て 小巻若菜

昼顔の川辺に吹かれるたりけり 齋藤朋子

初夏の明るき雨を眺めみる 柴崎和男

衝立に上衣ひっかけ泥鰌鍋 高橋 均

孫の来て数の勉強豆ごはん  
綿飴を三袋買ひし夜店かな  
山桃を散らかし鳥の群れ立ちぬ  
樹の蔭の溝を明るく半夏生草  
青さぎの獲物を狙ふ舟寄せ場  
短夜やメジャーリーグの試合みる  
亀石と彫らるる岩に苔の花

時田義勝

菖蒲田を巡る木道傘の列  
梅雨の蝶去ればたちまちもとの道  
腕時計重たき日なり梅雨最中  
梅雨晴間都電たちまち次の駅  
行く先の畑にけぶる山法師  
布を裂くの一瞬の所作夏祓  
出格子の向うを通る白日傘

中島和子

貫井照子

梅雨ぐもり追悼ミサの声すみて  
午後八時ほらほらきたね蛍きた  
ひいふうみ庭の蛍に夫をよぶ  
掌の蛍に見入る子の面輪  
蛍火のひとつがすいと神木へ  
踏みしめる水面のへこみあめんぼう  
籠の鶉にニツクネームのありにけり

野口希代志

行々子櫓の軋みかき消して  
横向きの牛久大仏西日差す  
傘寿てふ植木職人藤手入れ  
かどごとに余り苗あり朱鷺は飛ぶ  
蓮の葉をころつと落ちる水の玉  
木造の五百羅漢や梅雨湿り  
軽トラが行くまつすぐな青田道

萩原 溪人

葉が百年の木に風青し  
炎昼の街頭に聴くベンチャーズ  
黒南風や荒川渡る貨車の音  
花かたばみ添へてムニエル卓の上  
糠漬にぱらり夜店の唐辛子  
指先でぽきりぽきりと刈る蕨  
十薬や廃屋の窓半開き

萩原 久代

松蝉の鳴きぬる方へ回り道  
掘り立ての筍包む新聞紙  
雨の日の側溝詰まる竹の秋  
草茂るホルスタインは点点と  
吠えもせず門にねる犬梅雨長し  
雨の日の庭の紫陽花眺めをり  
ヘルパーと手をつなぐ友梅雨晴間

橋本美代

万作翁 五月の夜を舞ひ納む  
菖蒲田の荒れて本土寺人を見ず  
ソニックビルの上部が見えぬ梅雨曇り  
梅雨雲にとりこまれたるへりポート  
梅雨寒に今日も鬼平犯科帳  
幼子の額に朱印浅間講  
雲厚く今日が大暑とテレビ告ぐ

濱野新

校庭の隅にひっそり立葵  
鳴る前に目覚ましを切る明易し  
生憎の雨 六月の日曜日  
走り梅雨父の応召日記読む  
背を反らし空を見上げる梅雨晴間  
冷奴薬味に七味唐辛子  
エラーしてボールを追ふ子夾竹桃

広瀬 濟

美味なりと筍飯の焦げの味  
鉄塔の影長々と青田かな  
サングラスとればいつもの妻の顔  
参道の下駄屋の軒につばめの巢  
はらはらと帽子に肩に竹落葉  
露味噌を酒の肴に政談義  
額咲くや庭の片隅はんなりと

本郷美代子

公園の昼食時に夏雀  
身を軽く能舞ふ翁の宵  
肃々と祓ひ始まる薪能  
梅雨寒や夫病院に出かけたなり  
タクシーを待つもどかしさ梅雨の宵  
父の日に子は定番の酒を提げ  
うつらうつら鳩の声聞く夏の朝

老鶯が鳴いて木曾路の夜は明ける  
蜘蛛の囿の張る無住寺に雨宿り  
黄熟の麦畑徐々に土色に  
伊那山中ブルーポーピーの花盛り  
思はざる通り雨なり川床料理  
尾瀬沼に荷揚げのへりや雲の峰  
地に落ちてたちまち錆びる沙羅の花

本田武

等伯を青葉の寺に訪ねけり  
宇治川の瀬音涼しき茶店かな  
信徒等の声明聞こゆ初夏の風  
池覆ふ浮葉を打てり俄雨  
退きて丸三年や梅雨寒し  
中元の賑はひ遠し定年後  
しな垂れし紫陽花に水かける孫

増田裕司



松本善一

揺れる橋より見下せば渦見船  
太き声の返事もヅカの入学式  
紙函の上より香る桜餅  
小上がりや舟盛りに添へ浜防風  
甚平着て家事見習ひの傘寿かな  
母の日や蠟燭に灯を点すだけ  
青葉風小さき拳銃婦警帯び

箕田健生

落梅をひとつ転がし歩みけり  
我が庭に来る人の無し額の花  
梅雨晴や八幡宮の紅き屋根  
梅雨曇り親しき友の訃報あり  
梅雨晴間岩場に亀の甲羅干  
白鷺のさつと飛び去る浅間橋  
白百合の赤き雄蕊が五六本

どくだみの静かすぎたる花ざかり  
押さへてもふくらむ封書夏來たる  
読みもせず捨つるチラシや竹の秋  
梅雨の月濁りし川を照らしけり  
こぼるるに風をまたずに沙羅の花  
夏萩の万の蕾に紅兆し  
人々に夜空は一つ揚花火

武藤節子

全面が芝の校庭梅雨晴間  
蔦茂る中山道の写真真館  
しばらくは檜並木の木下闇  
まだ続くく黒板塀や青楓  
今年竹空に向かひて伸びに伸び  
タワービル夕焼け空に映えにけり  
町中の畑の夫婦や茗荷の子

村田武

森美佐子

花組の公演近し夏きざす  
筍の皮剥ぐ毎に艶やか  
豆飯を井に盛りけふの昼  
梅雨湿り子鼠庭を走り抜け  
根つこから抜く十薬や匂ひ充つ  
泰山木天辺にまで花咲いて  
掘り返す土の中から蚯蚓かな

山本久枝

薔薇園の見どころにある木のベンチ  
蔵壁に高窓ひとつ蔦青葉  
串刺の鮎逆さまに焼かれけり  
麦の穂の揃ひ武州の風やはら  
揚げ船の底に船虫走りをり  
静けさの中より香る夜干梅  
鬼灯市百の鉢よりひとつ選り

湯本正友

春の雷ホームの照<sup>あかり</sup>明ふと灯る  
息とめて新緑に来る鳥ながむ  
新入生を中央に組み登校班  
風薫る校舎の二階歌ながれ  
高枝の枇杷を捜せばカラス鳴く  
夏わらび摘む背に風と子羊と  
鰻井をゆつくり食べてひと日終へ

湯本実

「孫の手」を手にしソファーにゐる薄暑  
開け放つりビンダの窓柿若葉  
足場組む鳶のやりとり五月晴  
「大きいよ」とジャンボ蚕豆隣家より  
日の盛りハンマーを振る解体屋  
かつ井を食べて一息夏座敷  
Tシャツであめんぼう見に公園へ